

4. 非鉄金属技術分野における 国際標準化アクションプラン

1. 分野の全体概要・最近の動向

非鉄金属技術分野における国際標準の TC は、現在、IEC/TC90（超電導）、ISO/TC18（亜鉛及び亜鉛合金）、26（銅及び銅合金）、79（軽金属及び同合金）、107（金属及び無機質皮膜）、119（粉末冶金材料及び製品）、155（ニッケル及びニッケル合金）、174（ジュエリー）、183（銅、鉛、亜鉛及びニッケルの鉱石並びに精鉱）の 9 つの TC が活動しており、すべての TC で日本は P メンバになっている。

我が国は、IEC/TC90 で TC 幹事国業務を行っているほか、ISO/TC79（軽金属及び同合金）で SC 幹事国業務を、ISO/TC183（銅、鉛、亜鉛及びニッケルの鉱石並びに精鉱）で WG のコンビーナを担っており、これらの TC では主導的に国際標準の新規提案、改正提案を行っている。

また、ISO/107（金属及び無機質皮膜）、ISO/119（粉末冶金材料及び製品）、ISO/174（ジュエリー）/WG1（純度決定方法）では、国際標準活動は活発であり、我が国は、国際投票に対しコメント提出を含め、積極的に回答しているが、我が国からの規格提案活動はない。

一方、ISO/TC18（亜鉛及び亜鉛合金）は、2006 年で制・改正作業を終え、活動を停止している。ISO/TC26（銅及び銅合金）は、永らく活動が沈滞しており、現幹事国が辞退を表明している状況である。

非鉄金属技術分野における国際標準化活動は、これまで、総じて独、仏などの欧州勢が中心であったが、日本以外では、韓国が ISO/TC107（金属及び無機質皮膜）、ISO/TC107/SC3（電気めっき）、ISO/TC107/SC8（化学皮膜）で幹事国業務を担い、中国が ISO/TC79/SC11/WG4（材質分類）、同 WG5（材料規格）、ISO/TC183/WG15（ひ素の定量）でコンビーナになるなど国際標準化活動を強化しており勢力分布が変化しつつある。

なお、参加地位、国内審議団体、幹事国等の全体概要は、6.（1）のとおりである。

2. 重点 TC の選出及び国際標準化戦略（中期的計画及び課題）

（1）重点 TC の選出及びその理由

IEC/TC90（超電導）及び ISO/TC79（軽金属及び同合金）は、超電導材料やチタン材料など我が国が技術開発で優位に立ち、国際規格制定等の活動を積極的に行うことによって、我が国産業競争力、市場創成拡大に資することから重点 TC として位置づけることとした。また、ISO/TC183（銅、鉛、亜鉛及びニッケルの鉱石並びに精鉱）は、資源のほとんどを輸入に頼る我が国において、分析に係る国際標準が価格に直結することから、国際規格制定等の活動を積極的に行うことによって、国際商取引の円滑化に資することから、重点 TC と位置づけることとした。

（2）重点 TC の国際標準化戦略（中期的計画及び課題）

① IEC/TC90（超電導）

超電導分野の国際標準化活動は、1989 年に IEC としてわが国で初めての幹事国を引き受け、1990 年に財団法人 国際超電導産業技術研究センター内に IEC/TC90 超電導委員会を設置し、現在に至っている。TC90 総会は、約 2 年に 1 度の間隔で開催している。総会が開催されない年には、国際的な学会に合わせて WG、パネル討論会等を開催し、国際合意の醸成

に努めている。

これまでは基盤的規格である超電導材料の試験方法規格を我が国が提案し、成立させてきた。今後は、産業競争力、市場創成拡大の観点から、製品規格の標準化を目指すことにシフトすべく、その手始めとして、「超電導線材の特性試験方法に対する一般要求事項」の国際標準提案などを行うこととする。また、関係するTC等との連携を図りながら、製品規格化への国際合意を形成し、引き続き、この分野の国際標準活動を主導的に活動していくこととする。さらに、今後市場投入が期待される高温超電導体については、研究開発と標準化とを一体的に推進していくことが重要である。

具体的研究開発テーマとしては、エネルギー・環境技術標準基盤研究の「大面積超電導膜の臨界電流密度とその分布の測定方法の標準化事業」（16～18年度）からの成果として「超電導－エレクトロニクス特性試験方法－高温超電導体のマイクロ波帯表面抵抗の電力依存性」及び「超電導－エレクトロニクス特性試験方法－大面積超電導薄膜の局部的電流密度とその分布」の2件を2008年に提案予定である。また、超電導エレクトロニクス素子及び超電導電力機器に関する国際標準化を目指して調査研究を行っていくこととする。

② ISO/TC79（軽金属及び同合金）

SC2（陽極酸化アルミニウム）で、基準認証研究開発事業「陽極酸化塗装複合皮膜の耐久性試験方法等の標準化」（平成13～15年度）の成果を基にした「アルミニウム陽極酸化塗装複合皮膜の一般規定」を国際規格化していくこととする。そのためには、日本が主導的に国際標準化を推進していくことが重要なのでSC2幹事国業務を引き受ける予定である（2007年4月引き受けが決定した）。また、耐食性に対する環境試験法に関し、今後、さらなる国際合意形成活動として実験データの提示等が課題である。

SC5（マグネシウム及びマグネシウム合金）でも、近年、需要の拡大に伴って活動が活発化しているため、迅速法によって提案されたISO/DIS 26202（防食用マグネシウム陽極）で規定する化学成分及び試験方法が、日本での実態とかけ離れていることを指摘し、今後、日本から修正提案する予定である。

SC6（アルミニウム及びアルミニウム合金展伸材）では、仏・米などの賛成によって16の展伸材関係規格の廃止が決議されたが、EN規格をベースに新たにIS化されると、日本の意見を反映しにくくなることが予想されることから、この16件の規格は、廃止ではなく改正を主張していく方針である。

日本が幹事国業務を行っているSC11（チタン）は、これまで各国の規格のみで国際規格が存在しないため、日本がSCの設置を提案してできた新規分野である。現在、日本が規格提案した試験方法規格の成立を目指し、活動しているが、今後は、JISを基にした製品規格提案を行うことに注力し、IS化を目指す。そのためには、現在SC11に参画していない米国の勧誘が目下の課題である。

③ ISO/TC183（銅、鉛、亜鉛及びニッケルの鉱石並びに精鉱）

中国の経済成長を背景とした近年の非鉄金属価格の高騰に示されるように、世界的な資源不足の状況に至っている。非鉄金属鉱石の国際取引においては、サンプリング及び分析によりその価格が決定されるため、資源確保の観点からも日本の分析技術の信頼性を国際

的に認めさせることがますます重要となっている。これまで、WG3（銅精鉱中の銅の定量法－滴定法）、WG6（亜鉛精鉱－亜鉛の定量法－水酸化物沈殿分離-EDTA滴定）、WG5（鉛精鉱－鉛の定量－酸分解-EDTA滴定法）、WG17（銅・鉛・亜鉛精鉱－金、銀の定量法－乾式試金-重量法/AAS）においてコンビーナを務め JIS で規定する方法を IS 化してきた。WG13（銅、亜鉛精鉱－銀の定量－湿式分析）では、現行の ISO 規格（亜鉛硫化精鉱の銀の定量方法）に問題があり、ICP 法においてマトリックスマッチングが必要との日本の主張が認められたため、この規格を廃止にすることを前提に 2006 年に我が国が規格提案した銅精鉱にも適用できる規格を今後、国際共同実験を経て、2009 年の発行を目指すための活動を強化することとする。この規格が制定されれば、銅、鉛及び亜鉛精鉱の全ての買鉱対象成分の分析方法に日本の方法が採用されることとなる。

3. 重点 TC の活動状況

(1) 対象としている TC/SC/WG 番号及び名称

6. (1) 表中重点分野の欄に◎印を付けたものが重点 TC である。

(2) 対象としている TC/SC/WG の最近の動向

【IEC/TC90（超電導）】

P メンバ：11 か国（日、米、仏、独、中、韓、伊、露、オーストリア、ポーランド、ルーマニア）

近年は 2 年に 1 回のペースで国際会議を開催している。2006 年は 6 月 6～8 日に京都で開催した。

これまでに制定された 14 件の規格のうち我が国の提案によって 13 件（用語規格 1 件、試験方法規格 12 件）が制定されている。このうち、2006 年に 5 規格の改正を終え、現在、2 規格の改正に取り組んでいる。

2006 年京都会議において、「超電導－電流リード－超電導電力リードの特性試験方法に対する一般要求事項」を日本から新規提案することが承認され、9 月に正式に新規業務項目となった。この規格案を推進するため、2007 年 2 月に WG12 の設置が決まり、コンビーナを日本が担うことが決定した。この結果、現在活動している 12 の WG と一つのアドホックグループのうち、コンビーナ 7 名、副コンビーナ 5 名を占めることになった。

また、韓国から極薄膜の表面インピーダンス試験方法のプレゼンテーションがあり、NWIP の手続きに進むことが承認され、今後、韓国の動向に注意が必要である。

アドホックグループで検討している“不確かさ”について、現在 FDIS 以前のメンテナンス規格から盛り込んでいくこととなった。

【ISO/TC79（軽金属及び同合金）】

P メンバ：18 か国（日、仏、米、英、加、中、韓、豪、伊、露、スペイン、ルーマニア、スイス、ルーマニア、サウジアラビア、エジプト、イラン）

近年は、年 1 回のペースで国際会議を開催している。2006 年は 9 月 19～22 日にカナダ・モントリオールで開催された。SC5（マグネシウム及びマグネシウム合金）会議、SC11（チタン）会議は、それぞれの関連学会に合わせて、分離開催している。

幹事国のフランスから、SC の再編提案があったが、この問題を日・米・仏が参画する

アドバイザーグループを組織し、引き続き検討することになっている。

2006年9月の国際会議で、活動休止中であったSC1（化学分析方法及び分光分析方法）を解散することが議決された。今後、SC1の現行ISO規格は、TC直轄で取り扱うこととなった。

SC2（陽極酸化アルミニウム）は、日本が積極的に国際標準化を進めている。SC2は1991年以降、活動休止中であったが、日本が幹事国業務を引き受ける意思があることを表明するとともに、規格提案を行っている。

SC4（アルミニウム地金）は、日本が幹事国業務を担っているが、活動範囲はアルミニウム新地金に限定されているため、当面の課題は無い。

SC5（マグネシウム及びマグネシウム合金）では、EN規格のIS化が進められている。米国（Oメンバ）は、SC5に参加したことがなく、ISOとしては、ASTMと協調するために、米国の参加を求めている。

SC6（アルミニウム及びアルミニウム合金展伸材）では、定期見直しに係る16の展伸材規格の廃止提案があり、日本の改正要求にもかかわらず、廃止が議決された。

SC7（アルミニウム鋳物）は、ISO 3522（アルミニウム合金鋳物の化学成分と機械的性質）が2006に改正されたところであるが、地金の化学成分と合わせるように日本から意見を提出している。

SC9（記号）では、船舶用の鋳物の質別記号の規格化提案が行われている。

SC11（チタン）は、日本が議長及び幹事国業務を担っており、近年チタンの国際市場が急速に拡大していることを背景に、日本が中心となって試験規格を先行させて規格開発を行っているところである。今後は、製品の規格化に注力していく方針である。また、SC11のScopeを「非航空機分野のチタン及びチタン合金」から「商業用途のチタン及びチタン合金」に変更することになった。

【ISO/TC183（銅、鉛、亜鉛及びニッケルの鉱石並びに精鉱）】

Pメンバ：16か国（日、豪、米、英、仏、独、中、韓、露、ベルギー、フィンランド、ポーランド、ポルトガル、ハンガリー、アルゼンチン、フィリピン）

2年に1回のペースで国際会議を開催している。2006年は10月23～27日に中国・北京で開催された。

WG4（銅精鉱—銅の定量—電解重量法）では、現状に合わない不必要な分析操作が規定していたことから、2003年に日本から改正提案を行い、2006年6月に第2版として発行し、業務を終了した。

WG6（亜鉛精鉱—亜鉛の定量）では、試料の分解操作の残渣処理に不適切な規定があり、JISとも不整合であった2規格について、修正要求を行った。両規格は日本からの改正提案となり、2006年6月に第2版が発行し、業務を終了した。

WG9（サンプリング）では、4規格について、技術的内容を含む30項目以上の修正要求を行い、日本の意見を反映した規格が2006年3～6月に第2版として発行された。

WG13（銅、亜鉛精鉱—銀の定量—湿式分析）では、現行の亜鉛硫化精鉱の銀の定量方

法に関する ISO には方法に問題があり、ICP 法におけるマトリックスマッチングの必要性を主張してきたことが認められ、この規格を廃止することを前提に、銅精鉱にも適用できる規格を日本が主査となり、新規に提案した。

WG14（銅、鉛、亜鉛精鉱－水銀の定量）では、日本が国内分析所の調査結果に基づき、定量範囲の変更などを求めていたが、2003年にコンビーナが不在となり活動が休止となった。北京会議で中国が提案した中国国内法を検討することになり、国際共同実験を開始するとともに引き続きコンビーナを募集することになった。

WG15（銅、鉛、亜鉛精鉱－ヒ素の定量方法）では、日本からマトリックスマッチングや残渣処理方法の修正案を提出し合意がなされていたが、2003年にコンビーナが不在となり活動を休止となった。北京会議で既に合意できている改正原案を基に中国がコンビーナとなって、再スタートすることになった。

WG16（銅、鉛、亜鉛精鉱－フッ素及び塩素の定量方法）では、当初ドイツから提案があったフッ素の定量方法に対し、国内共同研究の実験結果を踏まえた日本提案の方法が優れていることをコンビーナ（豪）が認め、日本から日本鉱業協会法を基にした新規提案することになった。

WG18（銅、鉛、亜鉛精鉱－多元同時分析－蛍光X線法）では、オーストラリアから提案のあった方法に対し、日本をはじめ各国から技術的な指摘があった。次回の国際会議までに規格修正し、あらためて NWIP を再提案することになった。日本は、国際共同実験に参加するとともに、不利にならないよう規格内容を精査していく方針である。

WG19（可溶性塩素の分析）では、日本から精鉱の船舶輸送時の海水濡れの分析方法の制定を主張し、修正案を提供してきた。コンビーナの辞退表明を受け、活動が休止しているが、再開後、日本は、国際共同実験に参加するとともに、積極的に修正案を提供していく方針である。

4. 我が国の活動実績（2006年）

（1）全体概要

IEC/TC90では、2006年6月6～8日に京都で総会を開催して、日本からの29人に外国参加者を加え47人が参加した。TC90では標準化対象が超電導材料の試験方法だけだったが、製品規格の標準化を目指すアプローチとなる規格「超電導－電流リード－超電導電力リードの特性試験方法に対する一般要求事項」が新規提案することが承認され、正式に新WGでの議論が始まることとなった。既存各WGにおいても、日本が中心メンバーとして既存規格のメンテナンスなどの審議を行った。

ISO/TC79では、2006年9月19～22日に開催のTC79総会に、日本から4名が参加し、積極的に対応した。SC2（陽極酸化アルミニウム）では、日本からの改正規格提案が認められ、改正審議を開始することになった。また、同会議において、日本がSC2の幹事国業務を引き受ける意思があることを表明した。SC11（チタン）では、2006年10月4日に開催のSC11会議に、日本から3名が参加し、日本提案の国際標準規格化を推し進めた。

ISO/TC183では、2006年10月23～27日に開催のTC183総会に、日本から4名が参加

し、現在活動中の 8 WG に積極的に対応した。WG13（銅、亜鉛精鉱—銀の定量—湿式分析）では、現行の亜鉛硫化精鉱の銀の定量方法に関する ISO には方法に問題があり、ICP 法におけるマトリックスマッチングの必要性を主張してきたことが認められ、この規格を廃止することを前提に、銅精鉱にも適用できる規格を日本が新規に提案することとなった。また、WG16（銅、鉛、亜鉛精鉱—ふっ素及び塩素の定量方法）では、当初ドイツから提案があったふっ素の定量方法に対し、国内共同研究の実験結果を踏まえた日本提案の方法が優れていることをコンビナー（豪）が認め、日本から日本鉱業協会法を基にした新規提案することが決定した。

（2）活動実績

①新規提案数

IEC/TC90 1 件

ISO/TC79 3 件

ISO/TC183 1 件

詳細は、6.（2）①のとおりである。

②国際会議（参加実績、日本での開催実績）

6.（2）②のとおりである。

③幹事国・議長等引き受け実績

6.（2）③のとおりである。

④その他の活動実績

特になし。

⑤活動実績の評価

IEC/TC90（超電導）

多くのコンビナーを輩出しており、各WGにおいて主導的に新規提案及び改正提案を行うなど積極的、かつ、活発な活動が行われていると評価できる。

ISO/TC79（軽金属及び同合金）

SC2、SC11 で、日本主導での国際標準化を進めており、また、他の SC においても日本の意見を明確に主張するなど積極的、かつ、活発な活動が行われていると評価できる。

ISO/TC183（銅、鉛、亜鉛及びニッケルの鉱石並びに精鉱）

コンビナーを務める WG13,17 だけではなく他のWGにおいても、新規提案するほか、他国提案規格に対しても積極的に技術データの提供を行ってきた結果、ほとんどの国際規格に日本の主張が反映されるなど、積極的、かつ、活発な活動が行われていると評価できる。

5. 我が国の活動計画（2007年）

（1）全体概要

【IEC/TC90（超電導）】

- － 2006年に日本が新規提案した規格の国際標準規格化を推進する予定である。
- － 現行 IEC 規格 IEC60050-815 及び IEC61788-4,6,8,11,13 のメンテナンスを推進する予定である。
- － 国際 WG 及び国際パネル討論会に委員派遣を行い、今後の製品規格化の新規提案に向け、国際専門家へのコンセンサス醸成活動を行うこととする。
- － 国内技術委員会及び各 WG 対応委員会を 1～2 回開催し、国際標準規格化を円滑に推進させることとする。

【ISO/TC79（軽金属及び同合金）】

- － TC79 総会（2007年9月26～28日、パリ）に2名以上参加し、日本の意見を主張していくこととする。特に SC6 で廃案決議され、その後廃止案件としてわが国に回示された 16 件の展伸材規格については TMB にも「廃止に反対」の意向を示しており、TMB での投票結果を踏まえて 2007 年の会議に臨み、併せて 2007 年以降の対応も検討を進めることとする。
- － SC11 国際会議（2007年6月8日、京都）が開催予定である。日本から提案して審議中の「チタン中の鉄の分析法－吸光光度法」など 4 件のチタン分析法関連の国際規格は本年中に成立する見込である。また、新たな規格の提案も行うこととする。
- － 日中アルミニウム表面処理規格会議（2007年4月16～18日、中国・鄭州）に参加し、日本が新規提案予定の規格の国際標準規格化を推進することとする。

【ISO/TC183（銅、鉛、亜鉛及びニッケルの鉱石並びに精鉱）】

- － 現行の ISO15247（亜鉛硫化精鉱の銀の定量方法）には問題があり、これを廃止し、銅精鉱にも適用できる規格を日本がコンビナーとなって 2009 年の発行を目指し新規に提案することとなったため、国際共同実験を実施する予定である。
- － ドイツが提案した ISO/WD13548（精鉱－ふっ素の定量方法）に対し、国内共同研究を踏まえた日本提案を示したところ、日本案が優れていること認められ、日本が新規提案することになったため、国際共同実験を実施する予定である。
- － 国際共同実験の呼びかけに対しては積極的に対応し、必要に応じて日本の意見を主張していく予定である。

(2) 新規提案予定件数 8 件

IEC/TC90 新規 1 件 改正提案 3 件

ISO/TC79 新規 4 件

(3) 幹事国等引受予定件数

ISO/TC79/SC2 幹事国及び議長 各 1 件（2007年4月実施済み）

6. 参考資料集

(1) IEC/TC90分野のISO/TC/SC及びWGの活動状況及び重点分野

ISO/IEC	TC番号	SC番号	WG番号	名称	参加地位	国内審議団体	幹事国	日本議長	日本主査	重点分野
IEC	90			超電導	S	(財)国際超電導産業技術研究センター	日			◎
			1	用語と定義	-		日		○	
			2	Cu/Nb-Ti 複合超電導体のIc試験方法	-		米		○副	
			3	高温超電導体のIc試験方法	-		日		○	
			4	Cu/Nb-Ti 複合超電導体の残留抵抗比試験方法	-		韓		○副	
			5	Cu/Nb-Tiの常温引張試験	-		日		○	
			6	Cu/Nb-Ti 複合超電導体のマトリックス構成比試験方法	-		日		○	
			7	Nb3Sn複合超電導体のIc測定方法	-		米		○副	
			8	超電導体の電子特性の試験方法	-		日		○	
			9	交流損失試験方法	-		米		○副	
			10	バルク超電導体試験方法	-		米		○副	
			11	臨界温度試験方法	-		日		○	
	12	電流リード	-	日		○				
ISO	18			亜鉛及び亜鉛合金	P	日本鋳業協会	ベルギー			
		1		亜鉛及び亜鉛合金の試験及びサンプリング法	P		ベルギー			
		2		鋳物用亜鉛合金	P		仏			
		3		亜鉛地金	P		米			
		4		亜鉛及び亜鉛合金の加工品	P	韓				
	26			銅及び銅合金	P	日本伸銅協会	独			
	79			軽金属及び同合金	P	(社)日本アルミニウム協会	仏			◎
			3	用語	-		独			
		1		化学分析方法及び分光分析方法	0	露				
		2		陽極酸化アルミニウム	P	軽金属製品協会	日	○		
		4		アルミニウム地金	S	日	○			
		5		マグネシウム及びマグネシウム合金	P	ノルウェー				
		6		アルミニウム及びアルミニウム合金展伸材	P	(社)日本アルミニウム協会	仏			
		7		アルミニウム及びアルミニウム合金鋳物	P	仏				
		9		記号	P	米				
	11		チタン及びその合金	S	(社)日本チタン協会	日	○			
	11	3	非破壊検査	-				○		
	107			金属及び無機質皮膜	P	(社)表面技術協会	韓国			
			1	溶射	-		-			
2			検査方法及び試験方法の調整	P	英					
3			電気めっき	P	米					
4			溶融めっき(亜鉛めっき等)	P	英					
7			金属めっき用腐食試験	P	ポーランド					
8			化学皮膜	P	英					
119				粉末冶金材料及び製品	P		日本粉末冶金工業会	スウェーデン		
	2		金属粉末のサンプリング及び試験方法	P	スウェーデン					
	3		焼結合金製品のサンプリング及び試験方法(超硬合金を除く)	P	独					
	4		超硬合金のサンプリング及び試験方法	N	独					
	5		粉末冶金材料(超硬合金を除く)	P	英					

ISO/ IEC	TC 番号	SC 番号	WG 番号	名称	参加 地位	国内審議団体	幹事国	日本 議長	日本 主査	重点 分野
ISO	155			ニッケル及びニッケル合金	P	日本鋳業協会	加			◎
		2		ニッケル、ニッケル合金展伸 材及び鋳物	P	日本伸銅協会	米			
		3		ニッケルの分析方法	0		加			
		5		フェロニッケル	0	日本鋳業協会	仏			
	174			ジュエリー	P	(社)日本ジュ エリー協会	独			
	183			銅、鉛及び亜鉛の鉱石並びに 精鉱	P	日本鋳業協会	豪			
		9		サンプリング	-		豪			
		10		統計	-		豪			
		13		銅及び亜鉛の精鉱－銀の湿式 分析法	-		日		○	
		14		銅、鉛及び亜鉛精鉱－水銀の 定量方法	-		豪（現在 不在中）			
		15		銅、鉛及び亜鉛精鉱－ひ素の 定量方法	-		豪（中国 へ変更予 定）			
		16		銅、鉛及び亜鉛精鉱－ふっ素 及び塩素の定量方法	-		豪			
		18		銅、鉛及び亜鉛精鉱－多元素 同時XRF法	-		豪			
		19		銅、鉛及び亜鉛精鉱－水溶性 塩素定量方法	-		米（現在 不在中）			

注1) ◎印がついているのが重点分野

注2) 日本議長、主査には○印

ISO/ IEC	TC 数	SC 数	WG 数		幹事	議長	主査
IEC	1		12	日本引き受け数	1		7
ISO	8	24	11	日本引き受け数	3	3	2

(2) 2006年活動実績データ

①提案規格数 新規5件、改正1件

ISO/ IEC	TC	SC	WG	規格名称	新規・ 改正の 別
IEC	90		12	超電導－電流リード－超電導電力機器用電流リードの特性試験通則	
ISO	79	11	1	チタン用語の定義	
	79	2		アルミニウム陽極酸化皮膜の一般規定	▲
	79	2		アルミニウム陽極酸化塗装複合皮膜の一般規定	
	79	2		アルミニウム陽極酸化皮膜厚さ測定の校正用標準板の仕様規定	
	183		13	銅・亜鉛精鉱－銀の定量－酸分解－原子吸光法/ICP 法	

注)改正は▲印

②国際会議実績

a)参加実績 7回 延べ49人

ISO/ IEC	TC	会議回数	参加人数
IEC	90	1	29
ISO	79	5	16
ISO	183	1	4

b)日本での開催実績 参加者36人

ISO/ IEC	TC	SC	WG	開催地	開催期間
IEC	90			京都	2006. 6. 6～8
ISO	79	11		東京	2006. 2. 7

③幹事国・議長等引受実績

ISO/ IEC	TC	SC	WG	幹事・議長・主査の別
IEC	90		12	主査
ISO	183		13	主査